

ブラジルでの子育て① ～末っ子編～



平成最後のお正月は、久しぶりにのんびり過ごすことができました。昨年は長男の中学受験があり、その前年の年までは毎年のように引っ越しがありました。そのうちに前まではブラジルからの一時帰国中に年越し。ブラジルに持ち帰りたいものの買い出しやパッキングに追われていました。

ひたすらダラダラしたいという野望を実現した今年のお正月には、これまでの怒涛の数年間がやけに思い出されました。長男が私立中学に通うことになったことを含めて我が家ドタバタ劇は、そういういえばブラジルから始まつたのです。

以前にも触れましたが、ブラジルで暮らすことになったのは夫の赴任によるもので、有名な都市でも観光地でもなく、全く名の知れない町に住んでいました。そのため英語は通じず、日本人学校もインターナショナルスクールも存在せず、子供たちは現地校に通いました。親でさえ意思

言われました。これ、上の子の時に日本の保育園でも聞いたなーと思いつつ、今は余裕なくて家では頑張れないなーとも思いつつ、私は先生に元気よく返事だけはしていました。オムツはパンツ型が売っていなくて、履き心地もよくなかったのでしょう。二歳の彼は歩きながらズボンに手を入れては勝手にオムツを外し、道に投げつけるという暴挙に出ることがありました。その度に私は拾いに行つて…。すれ違うブラジル人にもよく笑われていました。

次男は言葉が遅く、日本を出る時には単語が少し出る程度でした。しかし二年後には日本語とポルトガル語が交じった言葉をペラペラ一日中しゃべるように。担任は黒人と白人と日本語が話せない世代の日系人もいました。彼には言葉も肌の色もそもそも区別する概念がなく、世界は一つ、ワン・ワールドな末っ子でした。



文・写真
小宮華寿子
出版社編集部員
を経て、フリー
ランスの編集者
に。2男1女の母。著書に『ブラジル
の手しごと』(メイツ出版)がある。



イラスト
デザイン
寺沼麻美
切り絵作家、時々
デザイナー。「ゆ
らゆらゆれる北歐風手作りモビ
ル」(ネコ・パブリッシング)を監修。

のんびり過ごすことができました。昨年は長男の中学受験があり、その前年の年までは毎年のように引っ越しがありました。そのうちに前まではブラジルから一歳から入れる幼稚部があるところが多く、三人が同じ学校に通えたことです。子供たちも学校内で見かける兄弟の姿が心の支えになっていたようでした。

ブラジルでの生活は二年で終わりました。しかし子供にとっての二年は大きなものです。子供たちは全身で拒絶し、受け入れ、受け入れられて生きていました。

トイレトレーニングもブラジルです。幼稚園の先生に「園でトレーニングを始めるから自宅でもするように。園と家とで同時にすることが大切」と

ブラジルに渡ったのは末の子が二歳の誕生日を迎えた直後でした。魔の二歳、イヤイヤ全盛期をブラジルで過ごしました。

そして今、彼は小学一年生。ブラジルでの記憶は断片的にあります。が、ポルトガル語は覚えていません。勉強嫌いで口が悪い男児に育つてしましましたが、学校の先生から最近、こんなことを聞きました。ひらがなの読み書きがまだできない帰国子女の子女が転入して来て、彼がさりげなくその子を守っていると。直接優しくするわけではないのですが、「そんなこともわからないの」などと悪気なくも言ってしまいそうな子を制したりするそうです。帰国してからも苦労した兄の姿を見ていたからかもしれません。上の子たちのブラジルでの話は次回に続きます。